【報告】

東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)―人間経済における負債の多元性，相克，創造性」2023 年度第 3 回研究会（通算第 6 回目）

日時：

　開催日：2024 年 2 月 27 日（火）　10:00～17:15

場所：

　AA 研マルチメディア会議室(304)、オンライン会議室

プログラム：

10:00-10:05　司会　開始の挨拶

10:05-11:35　山田実季（AA 研共同研究員，京都大学大学院）「北タイ高僧の＜カリスマ＝贈与＞の亡霊：あれは私たちの寺じゃない」

12:35-14:05　林愛美（AA 研共同研究員，日本学術振興会）「「近代化」するケニアのマサイ社会における婚姻と婚資の授受」

14:05-15:35　高橋五月（法政大学）「貯蔵と放出：福島第一原発の処理水をめぐる負債と信用の流れ」

15:45-17:15　全員 総合討論

司会：箕曲在弘（AA 研共同研究員，早稲田大学）、佐久間寛（AA 研共同研究員，明治大学）

参加者：21 名

概要：

　2023 年度第 3 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施し、21 名が参加した。本研究会ではまずタイ北部での長期調査を終了したばかりの山田が、現地社会における仏教寺院の建立を事例として、カリスマ的宗教者による一方的な贈与が、ローカルな負債関係の持つモラルとしての側面を照射する可能性について検討を行った。次に林の報告では、現代マサイ社会の婚姻の事例から、伝統的な贈与物である家畜や日用品と、新たに登場した貨幣、それぞれの意味のせめぎあいの分析を通じて、「婚資」が持つ両義性とその現代的な変貌を読み解いた。最後に今回初参加となる高橋は、福島第一原発事故を契機とした地域社会と事故当事者である東京電力の関係を、「負債」との永続的な共存として位置づけるとともに、人間同士の社会的関係にとどまらないそのあり方を「原発汚染水の影響を調べるために飼育されるヒラメ」というハイブリッドな対象に注目して理解する試みを報告した。司会は箕曲と佐久間が務めた。各報告の概要は下記の通りである 。

（文責　橋爪）

北タイ高僧の＜カリスマ＝贈与＞の亡霊—あれは私たちの寺じゃない

山田実季（AA 研共同研究員，京都大学大学院）

本発表では、北タイ村落における仏教寺院を事例として、カリスマ的高僧（クルーバー）への都市信徒の熱狂的信仰によってもたらされた貨幣が、既存の寺院と村落における社会関係にいかなる変容をもたらしたのかを検討した。

北タイには、「クルーバー」（偉大な尊師という意。僧侶の尊称。）とよばれる高僧が、人々の信仰実践や暮らしに長らく重要な役割を担ってきた。そのひとつが、クルーバーが率いる寺院や仏塔の建立である。それは、積徳の機会であるばかりではない。その政治・地理的背景から、国家の周縁におかれてきた北タイの人々にとって、聖なる中心を建立する営為であった。

本発表では、新たなカリスマ的クルーバーの登場が、このような寺院建立をめぐる人間経済（人間関係の創造・維持・破壊）をいかに変えたのかを検討した。具体的には、かつてモーリス・ゴドリエ（2000 年『贈与の謎』）が聖なる「想像の核」とよんだ「個人や社会のアイデンティティを固定するのに必要な係留点」としての寺院と貨幣の関係に注目した。本発表で検討したのは主に三点である。

第一に、マックス・ウェーバー（2024 年『支配についてⅡ』）が論じた天賦の才をもつ非日常的な力としてのカリスマは、Ｊ・タンバイア（1984 年『The Buddhist saints of the forest and the cult of amulets』）は、カリスマの所有物（御守・魔除け等）が市場価値に換算されることを通していずれ物象化されるとした。対して本発表では、カリスマ的才をもつクルーバーＡは、都市信徒によってもたらされた莫大な富を村落共同体（村落の寺院建立支援・地域医療や学校の補助金等）に向けた慈善事業に費やしカリスマの威信をより高めていること、カリスマのばらまく貨幣さえも信仰対象となっていることに注目し、聖なるカリスマと貨幣との相互創造関係を指摘した。

一方で第二に、クルーバーＡの寺院建立においては、その背景に複数の寺院と村落を巻き込んだ土着の師弟関係の不和や軋轢の過程があった。その大きな要因は、クルーバーＡがかつて起居していた寺院の増築・修繕に対して十分に布施金を使用しなかったことにあった。本発表では、これによって生じた、クルーバーと長老の不和や村落の人々との軋轢の背景に、本来ならば「完遂に至ってはならない」建立によって創造・維持されるはずであった寺院と村落の社会関係を浮かびあがらせた。

以上を踏まえて第三に、クルーバーＡの寺院が、伝統的な寺院とは異質な＜想像の核＞へと変貌してしまった（「あれは私たちの寺じゃない」）点を指摘した。それは、聖なる＜想像の核＞としての村の寺院が、都市信徒の富にとって代わられ、村落の人々の布施＝贈与の機会が失われたことを意味していた。村落の人にとって寺院とは、先祖代々長い歴史をかけて産み育てていくものであり、それに財や労働力を尽くすことは、社会的参与の証としての負債を想像する営みでもあった。

以上、ゴドリエやタンバイアが、聖なるものと貨幣を相反するものと捉えたのに対し本発表ではこれを批判的に再考し、寺院建立と貨幣をめぐる人間経済への注目を通して、村落の人々にとってもつ貨幣や負債の意味を示した。

（文責　山田）

「近代化」するケニアのマサイ社会における婚姻と婚資の授受

林愛美（AA 研共同研究員，日本学術振興会）

本発表では、ケニアで移動性の高い牧畜を営んできたマサイの人びとの社会における、定住化、現金経済化以降の婚姻と婚資の授受について、とある「駆け落ち婚」の事例をもとに報告した。

マサイの社会では従来、少女の成人儀礼の際に婚約者によって婚資の一部が納められ、結婚式までにメインとなる家畜や品物が贈られる。結婚後に第一子が誕生し、その子の成人儀礼前にマサイ語で「2 回目の結婚」とも呼ばれる最後の婚資が納められると妻と子どもは完全に夫側のリネージに属する。

しかしながら本事例の夫婦は街のカレッジという親族や地縁集団のネットワークから外れたところで出会って駆け落ちし、都市部で暮らしていた。そして、第一子が生まれた後で初めて新婦の両親を訪れている。二人は一見、マサイの文化的文脈からはもはや離脱したように見える。しかしながら新郎が新婦の父に牛を支払って許しを乞い、それが受け入れられて以降は従来通りの交渉を経て婚資が納められた。婚資においては、新郎と義実家の関係性構築のために贈られる特別な家畜が最も重視された。また、贈られた婚資は親族、地縁組織のネットワークの中で広く再分配がなされた。これらの手続きを経て新婦の父は、生まれた子が新郎側のリネージに属することを了解した。本事例では、新郎新婦の親族が、婚資という文化的枠組みを利用しながらマサイの文化的文脈から逸脱した若い夫婦を親族集団のネットワークの中に位置付け直そうとする努力がうかがえた。

マサイの社会に現金経済が流入した 1980 年代以降、婚資の一部に現金が用いられる例が増えていることが先行研究において指摘されている。しかしながら本事例における新婦の父は、婚資として現金を受け取ることを拒否し、従来の婚資として好まれてきた家畜や嗜好品といった品物を要求することにこだわった。その理由として彼は、婚資は「それを受け取った人が娘を思い出せるような品物」が良いからであり、人びとがそれらを使う時「娘は祝福される」からだと述べた。しかしながら発表者の調査地では婚資に現金が用いられる事例も確認されており、先行研究の記述も踏まえると一概に婚資として現金が排除されているとは言えない。

婚資を複数人で集めるという手続きや受け取った婚資を花嫁側親族が再分配するというマサイの慣習は、人びとが娘を人間関係におけるただひとつの「結合中枢」（グレーバー 2016）であると見なしている典型的な事例であると考えられる。本事例で新婦の父は婚資として現金を拒否する理由について「子どもは現金で買う商品のようなものではない」と商業経済と婚資のやり取りとを区別するようなレトリックを用いたが、その背景には 20 世紀より忌避されてきた「娘を売る（*amir e ntito*）」と呼ばれる婚資を避けようとする思いがあったのかも知れない。今後は「娘を売る」婚資について、また婚資における現金の扱いについて研究を深めたい。

（文責　林）

貯蔵と放出:福島第一原発の処理水をめぐる負債と信用の流れ

高橋五月（法政大学）

福島第一原発事故後の海において、事故の負債と共に生きるとはどのように生きることなのだろうか。本発表ではこの問いを考察するにあたり、原発汚染水という存在に注目し、事故の負債が原発の歴史の中でどのように発生し、どのように処理され、またどのように対処されてきたのかを明らかにする。そして、この先長い年月にわたり継続すると予想される汚染水問題について、遠い将来まで消滅する見通しのない負債と共に生きる方法を探求する足掛かりを見つけることを本発表の目標とする。加えて、事故の負債と共に生きる方法についての考察をするにあたり、負債と信用の人類学とマルチスピーシーズ人類学の交差点にその足掛かりを見出そうとするが、文化人類学で最近注目を集めるこの二つの領域の協働の可能性を探ることもまた本発表の目標の一つでもある。

本発表では、まず事故の負債が原発の歴史の中でどのように発生し、どのように処理され、またどのように対処されてきたのかを明らかにするにあたり、地元沿岸漁業者が関わった互酬実践を原発建設に伴うものと原発事故にともないものの二つの時系列に分けて紹介する。そして、互酬性について３タイプに分類したマーシャル・サーリンズ（『石器時代の経済学』）の説明と池田光穂がサーリンズをもとに独自の見解も加えた説明を参考に、原発建設と事故に関する互酬実践が均衡的互酬性と否定的互酬性のどちらに分類することができるのかを検討しつつ、その検討過程で浮かび上がった気づきと疑問について言及する。

つづいて、サーリンズの英語原文を参照しながら、否定的互酬性を「何のおとがめもなしに利益をえること」と定義すると、原発にまつわる互酬実践が否定的互酬性としての要素が強まることを指摘しつつ、事故の負債と共に生きる方法の足掛かりとして「うしろめたさ」（もしくは「負債の感覚」）を発動させることについて議論する。

最後に、マルチスピーシーズ人類学（その中でも Anna Tsing らの共同研究である継ぎはぎのアンソロポシーンの議論）を参照しながら、「うしろめたさ」、もしくは「負債の感覚」を発動させる可能性について、福島第一原発敷地内で実施される「海洋生物の飼育試験」を事例として紹介しつつ考察する。特に、飼育試験の現場で登場する寄生生物の存在に注目しながら、寄生生物の野生性と新たな可能性を生む触媒としての性質について言及しつつ、事故の負債と共に生きる方策の探求との関わり合いを見出し、今後の調査研究の展望へとつなげる。

（文責　高橋）